明戸小学校初代校長 加藤改作と韮塚直衛 韮塚直次郎の娘婿

この写真は、明戸小学校初代校長の加藤改作と、その兄で後に韮塚直次郎の長女ゑいと結婚する韮塚直衛（加藤才之助）の貴重なツーショットです。加藤改作は散切り頭で洋服、韮塚直衛はちょんまげで和装であることから、撮影されたのは、文明開化間もない明治初期で、明戸小学校の開校（明治６年）と富岡製糸場の建設、竣工（明治５年）の同時期のものと考えられます。

明戸小学校の学校沿革史によると、加藤改作は明治６年１２月に明戸小学校の初代校長に着任し、同８年３月までつとめています。開校当時の明戸小学校の様子を沿革史から抜き出すと「創立当時収容せし児童は其の数八拾にして其の内女子は実に僅かにして数ふるに足りず其の年齢構成学力等は千差万別なり（中略）教師の困難想像するに余りあり」とあります。明戸小学校創成期の様々な困難を、職員と力を合わせ乗り越えていったのでしょう。写真の散切り頭で洋服という姿から加藤改作のハイカラな人柄も想像できます。

韮塚直衛は、明治２年に韮塚直次郎の長女ゑいと結婚し、韮塚家に婿として入っています。当時の韮塚家は、養蚕や菜種油、藍、米、麦など様々なものを扱っていました。また、結婚の翌年（明治３年）には直次郎が富岡製糸場の建設準備に取りかかり、さらにその翌年（明治４年）かわら職人を引き連れて富岡に引っ越しています。後を任された直衛は、婿入り後すぐ韮塚家の様々な事業を引き継ぎました。

また、直衛の功績として注目されるのは、当時認められていなかった年複数回の繭の生産を政府に認めさせたことです。当時、繭の生産は品質保持の観点から年に１回と法律（蚕種組合条例）によって定められていました。しかし、信州南佐久郡（長野県）では、風穴を利用し品質の高い繭を年複数回生産（秋蚕）できる技術がありました。法律の矛盾に気づいた直衛は、成塚村の川田兵治らとともに秋蚕を認めてもらうよう活動を始めます。そこで、信州から秋蚕の技術を学び、高品質の繭を年複数回生産できることを自らの手で確かめます。その上で、明治９年に埼玉県令あてに秋蚕の許可を求め嘆願書を提出しました。それを受け埼玉県令白根多助は、内務省に上申します。ところが、当時の内務卿大久保利通は、その上申を却下。関係者の処罰を命令します（秋蚕事件）。その報を聞いた尾高惇忠は、富岡製糸場の工場長を辞職して政府に秋蚕の許可を求めます。内務省の役人の中にも秋蚕に理解を示す者もいたこともあり、秋蚕事件の裁判では、直衛は４９円６５銭の罰金命令を受けますが、情状酌量の上、罪を免ぜられます。さらに、翌年１８７８年秋蚕を禁じた蚕種組合条例が廃止され、秋蚕が認められたのでした。

このように、秋蚕の将来性を見通し、強い信念を持ち、ついには政府をも動かす行動力に驚かされます。この写真の直衛の凜とした表情から、その人柄を感じることができます。

資料提供　韮塚善重　　文責　明戸小学校教諭　三菅洋輔